



# やかただより

広川町  
全戸配布

第114号  
令和2年4月

## 「稲むらの火」のご縁 !!

皆様は、「濱口梧陵さん」や「稲むらの火」を取り巻くご縁ということを考えてみたことはありますか。最近そういう場面に遭遇することが時々あります。テレビ・ラジオや新聞等マスメディアに登場することはよくあります。

2月11日、読売テレビ「一番遠い親戚さん!! 芸能人の家系図大調査」という番組がありました。タレントのDAIGOさんに焦点を合わせていました。おじいさんは竹下元総理というの有名なことですが、親や兄弟、叔父さん叔母さん、その配偶者の先祖をずっと辿っていくのです。20何親等とか言っていました。そうすると、財閥の関係者、大企業の創業者も出ていました。濱口家では、梧陵さんのひ孫11代目儀兵衛の弟に慎七郎という人が、DAIGOさんから繋がっていたのです。この慎七郎さんのお父さんが10代目儀兵衛・慶次さんです。その奥さんユキさんの姉妹が西郷隆盛に、そして岩倉具視に繋がり、現在では加山雄三さんで、おもしろい番組でした。実は放送前に番組制作会社から問い合わせの電話がありましたので、梧陵さんのことも詳しく伝えたのですが、それは放送では出ませんでした。

最近、富山県の伏黒さんという方から「稲むらの火」の紙芝居が送られてきました。富山大学に小泉八雲の「ヘルン文庫」があるということも紙芝居を制作するきっかけで、富山の宝として伝えていくそうです。

一方、東京都大田区に「勝海舟記念館」が出来て梧陵さんのことも少し展示されています。

松江や熊本の「小泉八雲記念館」、宮城県東松島市の旧野蒜小学校跡にできた体験施設「キボッチャ」にも「稲むらの火」コーナーがあります。北海道陸別町の「関寛斎記念館」には梧陵さんの肖像画を含め大きく取り上げられています。各地の施設にご縁があることがよく分かります。



「稲むらの火」の紙芝居が送られてきました。富山大学に小泉八雲の「ヘルン文庫」があるということも紙芝居を制作するきっかけで、富山の宝として伝えていくそうです。

## 南海トラフ巨大地震発生確率

政府の地震調査委員会は1月24日に、南海トラフ地震に伴い今後30年以内に津波に襲われる確率の地図を公表しました。



大津波警報の発表基準に相当する3m以上の津波は、太平洋側の10都県71市区町村に及ぶ広い範囲で26%以上の高い確率で襲来すると予測されています。広川町の予測は、3mが6%以上26%未満または26%以上となっています。また5mは6%未満または6%以上26%未満で10mは6%未満となっています。

100～200年間に繰り返し発生して起きる可能性が高い大地震を中心に想定されました。政府が津波の被害想定を確率の形で発表したのは初めてだそうです。

地震調査委員会によると、太平洋沖に延びる「南海トラフ」では、30年以内にマグニチュード8～9の大地震が70～80%の確率で発生する恐れがあるとされています。2012年に、東海から四国の太平洋岸に20～30m級の津波が来るという被害想定を発表し、最悪の場合の死者は23万1000人に上るとされています。しかし今回は、このような最大級の地震は最近の2000年間で起きていないまれな現象で、その確率の計算はできない、として対象からはずしたということです。

なお、調査委員会によると26%は「100年に1回」、6%は「500年に1回」起きる確率に相当するということです。気象庁によると、津波高3mで木造家屋が流れ始め、5、6mで全壊の被害が急増するとされています。

## 濱口梧陵と福沢諭吉の共鳴

— &lt;公設民営&gt;という新しい一手 —

春の訪れを告げる開花や鳥の美しい鳴き声を、紀州の内外で実感できる好季を迎えました。と同時に、新型コロナウイルスの感染拡大に直面した私たちにとっては、かなりしんどい時期を経験することになりました。

広川町の皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。やはり、健康第一。新型コロナ対策にも留意しながら、お互いに、いっそう自愛したいものです。

(本稿は3月初旬に執筆したものです)



著者紹介  
四天王寺大学教授  
慶應義塾大学客員研究員  
**曾野 洋氏**

1964年和歌山県生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、神戸大学大学院修士課程、名古屋大学大学院博士課程、慶應義塾大学SFC研究所上席所員、慶應義塾福澤研究センター客員所員、四天王寺大学教育学部長、同大学IR戦略統合センター長などを経て、四天王寺大学教授、慶應義塾大学研究員を兼任。2012年より毎日新聞にて、「範は紀州史にあり」を連載中。

皆さま、こんにちは。「濱口梧陵生誕200年未来会議」(会長・西岡利記町長)委員の、曾野 洋(その・ひろし)です。

本日の私は、濱口梧陵(1820~85年)と福沢諭吉(1835~1901年)が明治維新期の和歌山城下町において試みた、<公設民営>という一手について述べます。より正確に言えば、濱口と福沢は密に連携して、和歌山で公設民営学校のさきがけを構想しました。耐久社(現在の県立耐久高等学校)と比較すると、その存在があまり広く知られていない共立学舎という公設民営の学び舎の建営に着手したのであります。

それにしましても濱口と福沢のふたりは、ひとまわり以上の年齢差があるのですが、非常に仲良しでした。彼らは、それぞれのやり方で時代ニーズを先取りしようとする生きざまを模索したので、共鳴する部分が大きかったようです。この点は、和歌山県教育委員会から依頼を受けた私が、研究仲間と一緒に共編著『和歌山県教育史』全3

巻を刊行した際に、強く認識したことのひとつであります。

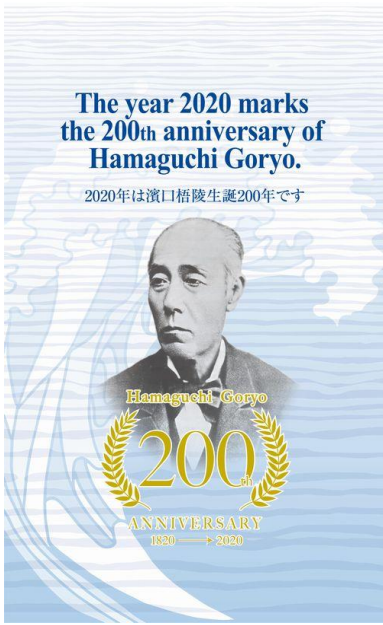
そして、福沢諭吉というひとは、濱口梧陵をはじめとする紀州人脈をととても大事にしたということ、特に強調しておきます。この史実については私が参画した共著『慶應義塾史事典』や、曾野洋「教育ベンチャーの季節—福沢諭吉と紀州—」(『福沢諭吉年鑑』第40号)などに詳しいので、参照くださると幸いです。



ところで、2013(平成25)年の秋、政府は産業競争力会議(議長・安倍晋三首相)を開き、新設する国家戦略特区で取り組む規制改革の論点群を決めました。それらの中で私が注目した論点は、特区で公立学校の運営を民間に任せる<公設民営>方式の導入であります。この方式は、地方自治体が建てた学校の管理運営を民間企業に任せる仕組みであり、既存の公立学校に刺激を与え、低迷する公教育のテコ入れ策として期待されたのです。

このようなく公設民営という発想を先駆的に取り入れ、時代ニーズを先取りする新しいタイプの学校を和歌山城下町で創設しようとしたのが、濱口梧陵でした。1869(明治2)年のことであります。すなわち、廃藩置県で紀州(和歌山)藩が消滅して和歌山県が誕生する2年前のことです。濱口が、藩執行部の一部や福沢諭吉を巻き込みながら練りあげた新しい学校構想は、「明治二年十月共立学舎新議」というかたちでまとめられました。

しかしながら共立学舎は、存立したのがわずか数カ月であったことからベールにおおわれた部分が大きく、いわば幻のような学校という感があります。そこで、紀州(和歌山)藩が新設資金を負担し、教育方針や運営は民間に任せようとした共立学舎が、なぜしかるべき成果を挙げないまま、その短い命脈を絶ったのか。この問題を以下で、



前掲『和歌山県教育史』でも示した先行諸研究などにも依拠しながら推論したいと思えます。

幕末維新期に民間（ヤマサ醤油経営者）から紀州（和歌山）藩重役に抜擢された濱口梧陵が構想し、福沢諭吉によって教育方針

を与えられ、福沢門下生で医学者の松山棟庵（1839～1919年）が運営したのが、和歌山城下に開校した共立学舎でした。松山は紀北地方出身の医師で、現在の東京慈恵会医科大学の開設に大きく貢献した人物です。そして、福沢諭吉が非常に信頼した松山は、福沢家のホームドクター的存在でもありました。

本格的な西洋学を教授するため紀州（和歌山）藩の公金で創られた共立学舎の規則は、当時の慶應義塾のそれを模倣し定められました。また、新規に英国人法律家のサンドロスを教員採用し、学舎の教育力向上も企図されたのです。こうして、

共立学舎は民間人である松山を中心として、福沢諭吉の敷いたレールの上を歩み始めたのです。もちろん、その歩みを全面的にサポートする立場にいたのが濱口梧陵であります。

しかし、共立学舎は長続きせず、廃藩置県を待たずして崩壊する。なぜか。おそらく、紀州（和歌山）藩士たちの反発があったと思われます。純粹な藩立学校でも私立学校でもない学舎は、じゅうぶんな理解と支持を藩内で得られなければ、その存立は困難なはずで、そのための説得工作を濱口や松山が試みた様子があまり感じられない点に、学舎失敗の一大要因を察知するのです。

今の政府あるいは文部科学省などが、本気で公設民営学校をこれからも模索するのならば、共立学舎の失敗史から学ぶべきところは大きい。そう、私は考えます。

最後に、ひとこと。共立学舎が閉校した数年後、その教育構想が新生和歌山県で、実におもしろいかたちで開花します。濱口梧陵が初代県会議長に就任する、少し前のことでもあります。このあたりの興味深い史実や、多彩な活躍を続けた梧陵の原動力については、本年6月に開催予定の広川町主催「濱口梧陵生誕200年記念シンポジウム」においても語りたいたいものです。

稲むらの火講座

	テーマ	講師・先生	講演当時の講師・先生の肩書
第1回	H27.5 オープン・マインドで生きる ～濱口梧陵と小泉八雲をめぐって～	小泉 凡	島根県立大学短期大学部教授 小泉八雲の曾孫
第2回	H27.8 濱口梧陵と福澤諭吉のコラボレーション	曾野 洋	四天王寺大学教育学部長・教授 慶應義塾福澤研究センター客員所員
第3回	H28.2 いのちを守る災害情報 ～巨大災害に立ち向かうために～	近藤 誠司	関西大学社会安全学部准教授 元NHKディレクター
第4回	H28.7 濱口梧陵と吉田松陰	よしだ みどり	作家・画家 元NTV「ロンパールーム」司会
第5回	H29.3 災害に強い地域づくり	中筋 章	和歌山大学災害科学教育研究センターコーディネーター
第6回	H29.6 東日本大震災から復興へ ～1000年に一度の震災は1000年に一度の学びの場～	阿部 憲子	南三陸ホテル観洋女将
第7回	H29.9 (台風のため中止)		
第8回	H30.3 広川町だからできる安全・安心なまちづくり ～「企業・地域・行政の強み」と「太陽の防災」～	奥村 与志弘	関西大学社会安全学部准教授
第9回	H30.9 災害から命を守る教育 ～広川の子どもたちが取り組むジュニア防災検定～	笠間 正弘	一般財団法人防災教育推進協会理事
第10回	H31.3 災害の記録を未来へ伝えるために ～災害を伝えるメディアに着目して～	石原 凌河	龍谷大学政策学部講師
第11回	R1.6 千葉県・銚子から見た濱口梧陵と危機管理	藤本 一雄	千葉科学大学危機管理学部危機管理学科教授
第12回	R1.9 野島断層からのメッセージ ～震災といのち・人とのつながり～	米山 正幸	ほくだん震災記念公園総支配人
第13回	R2.3 全国被災地語り部シンポジウムの取組みから考える防災・減災	山地久美子	大阪府立大学客員研究員 神戸大学地域連携推進室学術研究員

「稲むらの火祭り」の火

東京パラリンピックの聖火に

2020年は本町では「濱口梧陵生誕200年」で記念事業がいろいろ開催されると思います。ところが全国的には「東京オリンピック・パラリンピック」ということで大賑わいだと思います。オリンピックの聖火はギリシャで採火された火を全国リレーするのです。

ところがパラリンピックは、全国都道府県から火を持ち寄って集火して聖火になるそうです。その「和歌山県の火」が「稲むらの火祭り」の火が使われるそうで、これもたいへんうれしい事です。



「東京オリンピック・パラリンピック」は東日本大震災からの復興ということも一つのテーマでした。古い時代に、津波から見事に復興した話題「稲むらの火」がそのシンボルとして採用されたのは大会テーマに沿ったということでしょうね。

\*\*\*\*\*

<お客様の声>

丹波篠山は日本海側から1時間、神戸方面から1時間という、中間付近にあって、津波の心配はありません。ただ、日本海側に高浜原子力発電所があります。ここで事故が起こったらということも頭に入れておく必要があります。だから自治会長会では毎年被災地へ行って研修しています。

熊本、岡山県倉敷も行きました。東日本大震災の後には、福島へは何回か支援に行きました。

(丹波篠山市自治会で来られた方)

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター  
〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671  
<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>  
\*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)  
\*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)  
(世界津波の日の11月5日は開館)  
年末年始(12/29～1/4)  
\*記念館だけの入場は無料です



こんにちは！ 「こども梧陵プロジェクトチーム」の関西大学近藤ゼミ、龍谷大学石原ゼミです！ 今回は、ガイド実施時、稲むらの火の館の来館者に向けて、広小学校の児童たちが出題したオリジナルクイズの一部を掲載します。

問題1 (稲むらの火祭りについて)

広川町の恒例行事「稲むらの火祭り」、記念すべき第一回は、何年に開催されたのでしょうか？

1：1903年 2：2003年 3：2013年

<答え・解説>

正解は「2：2003年」です。「稲むらの火祭り」は安政の津波から150年目の2003年にスタートしました。稲むらに火をつけた梧陵さんのように、



参加者はたいまつを持って、避難場所である広八幡神社を目指して歩きます。わたしたちも参加しましたが、壮観でした。

問題2 (津波について)

津波の色は、沖合では何色でしょうか？

1：青色 2：黒色 3：どぶ色

<答え・解説>

正解は「1：青色」です。津波は、沖合では海面が隆起または沈降しているだけの状態なので、海水の色のままです。陸に近づくにつれて、海底の泥や砂を巻き上げるため色が濁ってきます。また、船舶や建物、自動車、家屋などものみこみ、人の命を奪います。

この他にも多くのユニークなクイズが生まれ、多くの人たちに披露することができました！

